

# プログラム

一般社団法人日本毒性学会 主催・公益社団法人石川県薬剤師会 後援

## 第13回市民公開セミナー

# 食品表示新時代

「かしこく摂ろう」「健康食品」

日時

2015年(平成27年)  
6月28日(日) 10:00~12:00

場所

金沢市アートホール

栄養成分表示(1本当たり)  
エネルギー 150kcal  
たんぱく質 2g  
脂質 0g  
炭水化物 40g  
ナトリウム  
カルシウム

1日当たり1本を目  
飲みください。本品  
摂取により疾病が増  
り、より健康が損  
なされるおそれありま  
す。摂取目安を守り  
、本品は、特定の  
成分を含有する食品  
と異なり、清涼飲料  
水ではありません。  
主成分、主成分、副  
成分のバランス

栄養成分分析表

エネルギー	80	kcal/100g
タンパク質	12	g/100g
脂質	8	g/100g
炭水化物	0.3	g/100g
ナトリウム	130	mg/100g
マグネシウム	0	mg/100g
カリウム	0	mg/100g
カルシウム	0	mg/100g
ビタミンE	0.9	mg/100g

一般社団法人 日本毒性学会 主催  
公益社団法人 石川県薬剤師会 後援

# 第13回市民公開セミナー 食品表示 新時代

～かしこく摂ろう「健康食品」～

## プログラム

**司会** 上野光一 (千葉大学 名誉教授)

10:00 ~ 10:05 **ご挨拶**

**鍛冶利幸**

(東京理科大学薬学部 教授 / 第42回日本毒性学会学術年会 年会長)

10:05 ~ 10:15 **はじめに**

**上野光一** (千葉大学 名誉教授)

10:15 ~ 11:00 **講演1**

「食品表示新時代に業界はどう対応するか」

**細山 浩** (㈱エム・エイチ・ビー 代表取締役副社長)

11:00 ~ 11:45 **講演2**

「正しく知り、正しく使おう。

サプリメントの安全性と有効性」

**佐藤洋美** (千葉大学大学院薬学研究院 助教)

11:45 ~ 12:00 **パネルディスカッション**

# 司 会



千葉大学 名誉教授

上野 光一

うえの こういち

## 経 歴

昭和49年 3月 千葉大学大学院薬学研究科修士課程(製薬化学専攻) 修了  
昭和49年 4月 帝人株式会社 入社 (生物医学研究所研究員)  
昭和54年 3月 帝人株式会社 退社  
昭和54年 4月 千葉大学薬学部 教務職員  
昭和58年 2月 薬学博士  
昭和59年 4月 千葉大学 講師  
平成元年 4月 千葉大学 助教授  
平成2年 3月 文部省長期在外研究員 米国ワシントン大学医学部  
平成7年10月 文部省特定研究領域在外研究員 米国ダートマス医科大学  
平成8年 4月 千葉大学大学院 助教授  
平成13年 4月 千葉大学大学院 教授 薬学研究院  
平成19年 6月 千葉大学予防医学センター兼務  
平成22年 4月 千葉大学予防医学センター副センター長  
平成24年 7月 フロンティアメディカル工学研究開発センター兼務  
平成24年10月 一般財団法人いのち輝く未来財団理事長  
平成26年 3月 千葉大学 定年退職  
平成26年 5月 千葉大学 名誉教授  
平成26年 6月 千葉大学予防医学センター 客員教授  
現在に至る

## 所属学会

日本毒性学会(理事)、日本性差医学・医療学会(理事)、  
日本免疫毒性学会(理事)等

## 賞 罰

平成4年 6月 アメリカ合衆国神経病理学会Weil賞  
平成13年 5月 平成12年度MHフォーラム論文優秀賞  
平成14年 3月 千葉大学ベストティチャー賞  
平成21年 7月 日本トキシコロジー学会田邊賞  
平成22年12月 国立医療学会第43回塩田賞  
平成23年 7月 日本トキシコロジー学会ファイザー賞  
平成24年 7月 日本毒性学会ファイザー賞  
平成26年 7月 望月喜多司記念賞

# 「食品表示新時代に業界は どう対応するか」

## 講演 1

### 講演要旨

近年健康ブームと言われておりますが、それは未病の方々が増えていること

の一側面であるとも言えるのではないのでしょうか。

昨今、TVの健康番組が人気を博し、健康に関する情報は氾濫し、TV宣伝の効果もあるかと思いますがサプリメントに興味を持っている方々は年々増加しております。結果、サプリメント市場は2兆円とも言われるほどの規模となりました。

一方医療費の高騰や医療保険の収支のバランスが悪くなっているという国家財政的な問題も生じており、また国民健康栄養調査では、ミネラルの摂取量が必要量の70%程度にしか満たされていないとの結果も出ています。

そのような観点からも、健康増進、医療費抑制のためにサプリメントをどのように活用し病気の一次予防を目指すか、との議論が活発に交わされております。

今回以上のような背景もあり、国民が健康を自ら守るべく健康食品を有効活用するために、健康食品に関する規制緩和が行われ、機能性表示が可能となりました。

今回の新たな機能性表示制度により健康食品がニーズに応じて選択しやすくなり、活用しやすくなったわけです。

また、健康食品市場における供給側、特に資本力の弱い中小企業・小規模事業者においてビジネスチャンスが広がったとも言えるでしょう。

株式会社エム・エイチ・ピー  
代表取締役副社長

細山 浩

ほそやま ひろし



これまで健康食品では、特定保健用食品と栄養機能食品（両者を総称して保健機能食品と呼ぶ）において、「おなかの調子を整えます」「脂肪の吸収を穏やかにします」「糖の吸収を穏やかにする」等の効果効能を示すことはできましたが、それ以外の健康食品は“いわゆる健康食品”と呼ばれ、効果効能をうたうことはできず、イメージを伝えることしかできませんでした。

そのような“いわゆる健康食品”に、今回の規制緩和によって、機能性表示食品という新たなカテゴリーが生まれたのです。

機能性表示食品とは、“いわゆる健康食品”だけでなく、野菜などの生鮮食品や一般の加工食品などのすべての食品が対象となります。食品表示法の食品表示基準に基づき、その食品の安全性や機能性に関する科学的根拠などの必要事項を消費者庁長官に届け出ること、販売企業の責任の下、機能性表示が可能となった食品です。

今回は機能性表示食品に関し、健康食品業界としての取り組みについて解説いたします。

## 経歴

---

1963年生まれ

1987年 東京大学農学部農芸化学科食糧化学研究室修了  
キッコーマン株式会社入社

1994年 農学博士取得(東京大学)  
アレルゲンフリーテクノロジー研究所(生物系特定産業技術研究支援センター出資事業)兼務

2002年 キッコーマン株式会社退社

現在、株式会社エム・エイチ・ビー代表取締役副社長  
神奈川科学技術アカデミー非常勤研究員  
日本アamani協会理事  
日本抗加齢協会事務局

## 賞罰

---

日本農芸化学会技術賞受賞(ブドウ種子ポリフェノールの開発)

# 「正しく知り、正しく使おう。 サプリメントの安全性と有効性」

## 講演 2

### 講演要旨

飽食の時代を迎えた現代日本社会では、肥満、動脈硬化、高血圧症状などの果

てに生活習慣病にかかるリスクが高まっていると考えられます。病気が発症する前に、生活習慣を正すことは大切です。そのサポーターとしてよく取り上げられるのがサプリメントや健康食品といわれる食品群です。ここではサプリメントという用語で統一することにします。サプリメントの主な利用者は不規則な食事等により健康に不安がある人や半健康人が想定され、健康人と患者の境界域に属する人たちが健康維持・増進のために活用するものです。ところがこの前提が忘れられがちで、特に医薬品と混同されることが最も重大な問題のひとつです。どのようにしたらうまく活用できるのでしょうか？

実はサプリメントの諸問題は専門家の養成が追いついていないことが根底にあると考えます。人々の健康に携わる専門職種は医師、薬剤師、看護師、栄養士、理学療法士など、たくさんのスタッフがいるわけですが、サプリメントはあるときは「おくすり」のように扱われ、あるときには「おかし」や「ごはん」のように扱われて変幻自在です。一定の領域をはみ出す製品群を前にはどうも気後れがして、胸を張って「サプリメントの専門家です」といえる職種はほとんどないと思います。上記のいずれもサプリメントのある一面を表すことは間違いないでしょう。しかし必ずしも純粋な成分だけで構成されていないサプリメントは「おくすり」のようにほぼ単一化合物として扱うことはできません。すなわち効果を発揮する成分はいくつもある

千葉大学大学院薬学研究院  
臨床薬理学研究室 助教

佐藤 洋美

さとう ひろみ



かもしれないし、どのくらい体の中に留まっているのか、色々な成分がどうやって排出されていくのか、常に集合体として考えなくてはならないのです。また「おかし」や「ごはん」と似ているようで異なる点は、サプリメントが食品の三次機能を特化させたものであることです。つまり、人間は美味しいと舌で味わったり、良い香りを感じたり、独特の触感を感じたりしながら食べ物を摂取するので、危険な味や匂いによって本能的に摂取を制限することができますが、食品の機能性が特化されたものではしばしばそのような人間の五感が働かないことが多いのです。そのような危険性を伴うならばサプリメントは取るべきではない、という思いに至る方もおられるかもしれません。

しかし私が強調したいのは、医薬品もサプリメントも使い次第だということです。まず、それぞれどのような方を対象に作られているのかを理解することです。幸か不幸かサプリメントの摂取は個人の自由度があり、医療スタッフの一見目の届かないところで間違った使い方している場合があります。しかし、これだけ利用が増えた現在、むしろ

医療スタッフが積極的に認識する姿勢でいかないと気づきに至りません。入院患者はもちろんのこと、むしろ外来通院の方々に注意の目を向けることは重要です。また予期せざる症状が出たときに、医薬品と一緒に服用されたのか、摂取からどのぐらいの時間が経過したか等、サプリメントとの因果関係を冷静に精査できる分析力が必要です。それから最も大切なことは、消費者がサプリメントの摂取を望んでいる場合に、その方に傾聴し、摂取可能な状況にあるのか寄り添って考えることです。疾病にかかっている医薬品を服用中の方は原則、体内動態の予測がどうしても不完全となるサプリメントの側の摂取を控えるべきでしょう。一方、快復期にあつて医薬品を中止できる段階にある方については、個別の注

意事項に気を付けつつ摂取できる場合もあります。適切なデータベース等の情報媒体を活用して製品に含まれる情報を十分に得ながら、常にリスク・ベネフィットのバランスを考慮し、個人の状況に適した具体的な提案を出すことが専門家のスタンスであるべきです。甘く見て安易に摂取を進めることは避けられるべきですが、どちらかという頭ごなしにサプリメントの摂取を否定する医療スタッフが多いのが現状です。その結果、医薬品を服用しつつも、医療スタッフには黙ってこっそりサプリメントを摂り続けている患者が少なくありません。超高齢社会にあつてセルフメディケーションが求められる現代、健康維持や慢性疾患予防のためにサプリメントへの期待は一層高まっています。一方で、医薬品服

用者のサプリメントとの相互作用の懸念、また代謝機能が衰えた状態でサプリメントの動態に変化がないのか等、多くの山積み課題があります。医薬品と同じようにサプリメントの専門家、アドバイザリースタッフが如何に大切かは自明です。アドバイザリースタッフは、いたずらに持っている情報を右から左へ流すのではなく、状況に応じて吟味する力、伝える力を鍛えることも必要でしょう。多くの医療職種がその素質を十分備えているはずですが、安全かつ有効なサプリメントの摂取のためには、高品質の製品が生産されること、既存の製品のエビデンスが蓄積されていくことと同じぐらい、アドバイザリースタッフの養成と活動が大きな役割を果たしていくと考えられます。

## 略歴

### 学歴・職歴

- 2004年 千葉大学薬学部総合薬品科学科 卒業
- 2006年 千葉大学大学院医学薬学府 修士課程 医療薬学専攻 修了
- 2008年 千葉大学大学院医学薬学府 後期3年博士課程 創薬生命科学専攻 修了
- 2008年 千葉大学大学院薬学研究院 高齢者薬剤学研究室(現・臨床薬理学研究室) 助教、現在に至る

### 所属学会

日本薬学会(医療薬科学部会若手世話人、薬理系薬学部会若手世話人)、日本薬理学会(学術評議員、代議員)、日本緩和医療薬学会(評議員)、日本癌学会、米国癌学会(AACR)、日本毒性学会、日本肥満学会、日本性差医学・医療学会、日本医療薬学会

